

## 第 2 章

## 敬虔主義の先駆者

シュペーナー - アウグスト・ヘルマン・フランケ  
ツィンツェンドルフ - 啓蒙主義社会の慈善事業

## 1

## 30年戦争 - 著しい身分格差の起こり - 信心が与えた衝撃

30年戦争はディアコニーの歴史にとって一つの深い転機を意味した。そのかぶとの紐は、なおしっかりと引かれていた。このことは短く述べなければならない。

戦争の主要な敗者は間違いなく農民であった。諸都市は、無防備の村の集落よりも、その外壁によって戦争の暴虐から身を守ることができた。家畜と種が足りなかった。加えて戦後1656年から1657年に東プロイセンにタタール人が入ってきて、およそ10万人の命が奪われた。1709年、苦しむ地にペストが広まり、ベルリンの門の前まで達した。約15万5千人が命を奪われた。南ドイツではもっと悪かった。バイエルンのより広い部分では土地の3分の1以上が荒れていた。帝国諸都市の住民数は17世紀の終わりになっても絶え間なく減少していた。

農民階級は、たびたび悲惨な状況にあり、国民の精神的また政治的生活から殆ど完全に締め出され、市民階級は苦勞しながら漫然と暮らしていた。ドイツ帝国諸都市の市民階級の古くからの輝きは、宗教改革時代には多くは残っていなかった。手工業は世間に広まった金不足のために沈滞した。物乞いが増大し、陰険で凶悪な性質をもつようになった。多くの退役兵士たちが集まって一団となり、たびたび脅迫的にふるまうようになったからである。処罰が要望された。さらにプロイセン王は1735年、3ターレル以上の価値のあるものを盗んだ泥棒

は、その行為をした場所で、絞首刑にするように命じた。縄はいつも手もとにあった。

貴族は、戦争の財産損失を、とりわけ北ドイツにおいて悪名高い「農民追放」によって埋める事が出来た。<sup>[1]</sup> だが、地方貴族の大部分は、生活状態は惨めなままであり、田舎者となった。この「田舎の貴族」とフランスの習慣を生んだ宮廷貴族との間に著しい違いが起こってきた。

社会的格差が以前になかったような仕方で広がるようになった。騎士「貴族」[Cavalier]は「下郎」[Canaille]すなわち他の諸階層を遠ざけた。居城は公園と鉄柵によって周辺から隔離された。礼拝堂の中には祈祷の小部屋が取り付けられた。聖晚餐式の時は身分の違いに従って祭壇の前に進み出た。祭式係は、次は誰が前に進み出のかを合図した。「その労苦の終わりを告げる最後の合図はわずかなチップだった」。身分の高い人の埋葬は聖職者の弔辞をぬき、たいまつ<sup>たいまつ</sup>の光の下で夜になされた。礼拝共同体は、着席順においてこの世の社会序列を写す鏡となり、わきに寄せられた身分の低い人々にとっては、教会は日常生活と同様に侮辱の場所であった。<sup>[1\*]</sup> 聖職者の社会的立場は、30年戦争以後、低下した。牧師は他の市民と同じように貴族から見下げられた。宮廷では、君侯の良心顧問官として、以前のほぼ全能の宮廷説教者にかわって、旅をした教養豊かな哲学に造詣の深い侍医が重んじられた。

都市において経済的に最悪の状態にあったのは、工場制手工業の中で、たいていは織物をつくる工場労働者であった。彼らはとりわけツンフト[同業組合]<sup>さきが</sup>で職人が持っているような同業組合の保護を失った「第4階級」の先駆けであった。

それに加えて、主流であった正統信仰は内的危機を迎えた。全信徒祭司制を語る人はいなくなった。ルターによって克服された聖職者と信徒との区別は、聖職を尊重する事によって再び戻された。聖職者は教理の純粋さと共同体の正統信仰が守られているかどうかを監視した。身分の格差の深刻化は教会生活の中に浸透し、30年戦争においてくすぶっていた教会批判と社会批判の風潮が増加した。分離主義者たちがあからさまに語る教会に敵対する風潮はヨーロッパではっきりあらわ

れ、ドイツでは1690年から1730年の間にその頂点に達した。秘密の無神論がひろまった。[1\*\*] 山積みの改革案が浮上した。ある一定の傾向を持つ人たちは、正統主義の中でそれを貪欲に取り上げた。

(改革正統主義)

## 2

敬虔主義の父、シュペーナー - シュペーナーの社会批判と  
社会福祉政策 - 公共の貧民援助の復活 - ベルリンの救貧院

これらの全般的に騒然とした空気の中で、1675年フィリップ・ヤーコブ・シュペーナー(1635-1705)は群れをなして集まる新しい信仰運動、敬虔主義のための信仰文書『ピア・デジデリア』(敬虔なる願い)をもって登場した。シュペーナーは、それによって敬虔主義の父となった。6つの明確な点で、彼は教会とキリスト者の生活を改善する改革の願いを一つにまとめた。彼はとりわけ全信徒祭司制の復活と、信徒が教会活動を自由に出来るように要求した。信徒は、聖職者たちと一緒に聖書を研究するチャンスが与えられなければならなかった。死んだ正統信仰に反対して、一つの信仰を求めた。彼は愛によって行う信仰を求め、「信仰と行為」、この2つは別のものでなく、互いに属しているという、ルターの関心事をよみがえらせた。[2]

一般に正統信仰が将来を見て心を動かしている悲観主義に対して、シュペーナーは来たるべき偉大な時について語り、全世界に宣教する可能性について、ユダヤ民族のキリスト教への改宗について、また対抗宗教改革の克服について語った。キリストを信じる信仰のために働く事は再び深い意味を獲得した。[3]

社会批判の声は17世紀にスピリチュアリストたちだけでなく、多くの立場の人たちから出されていたが、そのことも密接に関連している。すでにヨハン・アルントが書いて、ルター一門の幾世代も通して精神修養の本となっていた『真のキリスト教』の中に、強い社会的情熱があらわれている。財産問題について、次のような言葉がある。「火は金

持ちのために燃えるように、貧しい者のためにも燃える」「兄弟を愛さない者がどうして神を愛することができようか？」[4]

ヨハン・アルントは信仰の書物を携えて、社会的な関心と不安をドイツという家に持ち込んだ。極端な社会的格差は不可抗力なものとは思われなくなった。フィリップ・ヤーコプ・シュペーナーは『ピアデシデリア』の中で、「貧困は我々キリスト教の汚点である」と言い、社会の考え方の転換と社会的行動を呼びかけた。シュペーナーは、ヨハン・アルントの説教『真のキリスト教』の中で「本当に必要なもう一つの財産の共同」をはっきりと求めた。われわれの所有と財産は「共同の財産」と思うべきである。[5]

そのなかに社会的構造を持っている教会は、シュペーナーにとってもむずかしかった。そこで、そのことに熱心なキリスト教徒自身、社会的団体として団結して、神の国の業のために一致できる「自由」を求めた。彼はそれによって、職業と義務の中に献身とキリスト教の愛を個々のキリスト教徒に求めた。17世紀の独特な罪に反対して・・・「貴族」の、時を浪費する酒宴や踊り、ぜいたくな衣服、芝居見物を節約しあきらめるように要求した。[4\*] 領主は福祉のために臣民を世話し、そのために君主の職についている、国は貧しい人を保護すべきであると言って、彼は領主に期待した。ここでついにドイツ・プロテスタントの中に活動的な社会福祉政策が設けられた。この敬虔主義は、神がその人と出会ってくださり、また神が従うようによびかける声を聞き分けるすべての人が自分を献げるように義務づけた。

シュペーナーは先頭を行った。彼は、1666年、都市フランクフルトの主席牧師となり、無計画な施し物の分配をやめて町の貧民救済を新しく組織した。[6] 彼はこのことによってドイツ国内に広く知られるようになった。1693年、選帝侯フリードリヒ3世は、彼にベルリンにおける物乞いの悩みを改善する所見を求めた。当時、ベルリンは人口が1世代に約3万人から5万人に増加していた。その中には多くの退職した兵士、戦死した傭兵ようへいの寡婦と孤児がいた。社会的困窮は筆舌に尽くしがたいものがあり、女性と娘が数え切れないほど売春に雇われていた。シュペーナーは、彼の所見の中で、施し物をするより、仕事を

与えることを望んだ。傷痍軍人、寡婦、孤児はだれかれの区別なく、信仰告白の有無に関わりなく、公共の施設で、人間に値する世話を受けるべきだ。お金は、市民が毎週の家で集めた募金によって工面し、国は退役軍人のための給付金を支払った。矯正施設きょうせいせいと救貧院の管理は、ベルリンの監督教区長に選ばれた2人の議長と、市民から選ばれた12人委員会の手に委ねられた。この「中央貧民金庫」は、1695年に選帝侯によって創設された。2～3年の間に町の街路の風景から物乞いが見えなくなった。1702年に救貧院、「大フリードリヒ病院」が生れた。そこからベルリンのシャリテ[Charite]、孤児院、精神病院が生まれた。設立2年後には、ほぼ2千人を助けるようになった。[7]

間もなく、ドイツの多くの場所に似たような施設が生まれた。例えば、1725年、ポツダムに大きな軍の孤児院が出来た。これらの施設は確かに、はなはだしく困窮していた。しかし、それは大きな社会的な進歩を意味していた。というのは、30年戦争以降、公共の貧民援助は停滞していたからである。その場合、ウールホルンは正しく次のように述べている。即ち、30年戦争以降、住民を搾取して、ヴェルサイユの再現を思わせるような、無数の用地をもっていたドイツは、新しい社会福祉政策のために決して実り多い土地ではなかった。そこで人はシュペーターが先にしていたことの意味がわかったのである。[8]

国と福音主義教会内の特定のグループが軽蔑してきた敬虔主義者たちは、再び活発になり新しい思想と目標をもって社会的困窮に立ち向かった。

## 3

アウグスト・ヘルマン・フランケ  
キリスト教施設ディアコニーの新時代 - ハレの孤児院  
信仰の業 - 模範的な衛生学 - 寄付する喜び

シュペーターの友人であり、シュペーターの弟子である、アウグスト・ヘルマン・フランケ(1663-1727)は、当初、師が定めた目標のもと

で行動した。ハレの郊外の牧師として1695年に就任した彼の「グラウハウ貧民規則」は、新しい分担金によって貧民救済基金の収入をあげようとした時、まだ献金袋で寄付を集め、教会が参加する伝統的な公共福祉の道を行っていた。フランケは、土地の者でない人を拒む、当時支配的な地方エゴイズムに対して反対した。病気になった貧民や宿なしを「運搬車」に乗せて街道に運び出し、町の境に置き去り、それを繰り返す当時の大変ひどい業務は、彼にとってキリストの愛の掟と両立するものではなかった。[9]

新設のハレ大学で、社会批判的なこの牧師・教授はささいなもう一つのきっかけによって従来の伝統から離れるようになった。キリスト教ディアコニーの新しい時代がはじまった。

フランケはある時、4ターレル16グロッシェンを、救貧箱の中に見つけた。

「私はそれを手にした時、信仰の喜びをもって次のように言った。『これは正しいことに役立てなければならぬ誠実な資金である。私は貧民学校をはじめよう』。私はそのことについて、だれにも相談しなかった。・・・1695年のイースターに、私は貧民学校を非常にわずかな蓄えをもって始めた。その時、上にのべた4ターレル16グロッシェンは、それから、貧民学校だけが用意されたのではなく、すぐあとに孤児院をつくるようにうながされたよい出発であり、最初の資金である。」[10]

フランケは神を信頼して、新境地を開いた。彼は国の援助がなくても、寄付金や確実な収入がなくても、喜んでその日暮らしをする覚悟があった。つきつめた懐疑を通り抜け、根源的な力によって神の現実に強制されたその人は、驚くべき内的信頼をもって道を歩いて行った。あらかじめ心に抱いた計画に従うのではなく、神は彼を見捨てないという確固たる信仰に基づいて、信じられないような速さで活動は急速に発展した。

彼は近代的な人間である。彼は誠実な協力者ノイバウアーを、ヨーロッパで疑いもなく先進的な社会福祉施設をもつ、オランダの豊かな市民文化の中に送り込んだ。

アウグスト・ヘルマン・フランケは、ドイツで初めて、シュペーナーがまだ実行していなかった「孤児院と矯正院と刑務所」が一つになっていた施設から、孤児院を分離した。

フランケがハレに建てた孤児院はドイツで最も近代的なものであった。彼の協力者であるノイパウアーが、オランダに持っていった質問用紙は、近代の衛生調査の先駆となっている。身体の不潔さを不快と思わなかった時代に、次のような質問がなされた。「子どもたちは口を洗淨する際に何で歯を磨くのか？子どもたちは、いつ入浴するのか？どれくらいの人が櫛でとき、ブラシをかけているのか？ふきでものや疥癬、害虫を防ぐ手段として、何があるのか？どのようにして感染を防ぐのか？」<sup>[11]</sup> 新しい宮殿のような孤児院がハレに開設された。

少人数の家族原理による教育はまだなされていなかった。だが、いたるところで多人数の教室が避けられる傾向にあった。つとめて行われた牧会的個人指導の強化は、小さなわかりやすいグループの方向をとった。

フランケは『祝福に満ちた足跡』の中に、学校創設時のこの信仰の冒険を書いている。物乞いをしてお金を集めたことはなく、依頼の手紙も書いたこともない。金庫はしばしば空であった。フランケの未婚の仲間たちは、初めは山上の説教の聖句に従っていた。上着を2枚持っている人は、それを持たない人に与えなさい。彼らは孤児に必要な経費を支払うために、1度はスーツを売らなければならなかった。

「仕事をする際に、試練や極度の貧困であったことは、1度だけでなく、何度もあります。即ち、私は支払うすべを知らず、やっかいなことになった。その時、私は何も持っていないだけでなく、もらうこともなかった。初めに私は、助けを必要とする時がきたら、神は助けをもって臨んでくださるだろうと考えた。だが、私の時はまだきていない。また、神は私たちが困った時に、神に願った時とは別の時に、たびたび私たちを助けてくださるといふことが何を意味するかを学ばなければならなかった。

そして、そのような方法でダビデの言葉は理解された。「ああ汝、主よ、いつまでなのですか。」(詩篇6:4)「私は残り1文も持っていないこ

とがたびたびあった。次の日には200人から300人分の買い物をするお金が必要であった。私は、時には、戸口に立っている貧しい人に何かの足しになるように手渡すために、なにがしかのペニヒとわずかな硬貨をもっていなければならない。即ち、生活に最も必要なお金を作り、それでパンを買わねばならなかった。」・・・「次のようなことがあった。経理担当者が私のところにお金がないから、なんとかしていくらかの小銭でも得たいと、熱心に探し回った。彼は子ども達が暗闇の中で座らなくても済むように、なん本かのローソクでも買えればと思ったのだが、すっかり暗くなってしまいうまでに、何も手に入れることが出来なかった。」[12]

その日暮しをしなければならぬが、かといって没落しているのではないと、ハレの施設の初めの頃の話に、忘れがたいものとして書かれている。19世紀と20世紀に内国伝道事業において、こういうことが文字通り繰返されてきたことに言及せずに、近代におけるディアコニーの歴史を書くことは、事実を意図的に非学問的に隠してしまうことである。

多くの不安のなかにあって、すばらしい祈りが聞かれた困難な設立年になしたフランケの報告は、はかり知れない影響を呼び起こした。フランケの協力者で献身の用意をしていたのは青年と並んで、教授の大胆さを全世界に広めた大学生たちであり、彼らは居城で高級貴族の前に歩み出て、情熱的に報告した。学生たちはフランケの祈りが聞かれる経験をして重要な役目を引き受けた。彼らはしばしばなにかの施しものをもって、喜びに輝いた目をして、ほどよい時にフランケの前に立っていた。ドイツの内外で、例えばロンドンでも、貴族や躍進目覚しい市民階級の中に、みごとな事業の拡充のため資力を出す人たちの友情の輪が形成された。

## 4

伝道的、教育的、社会福祉の目標をもつディアコニーの出発 - 信仰教育 - ハレの教育は世界教会との関係を結ぶ

とぎれることのないこの賜物の流れは、おそらくもう一つの事実ほど重要ではない。フランケは当時の信仰の危機のただなかにいる何千ものヨーロッパ人に、もう一度活ける神を頼り勇気を持つように、ぜんまい仕掛けのようにこれから自動的に動き出す、規則的な世界創造を気にしない遠い昔の世界建築家に満足しないように、励ました。

新しい世代は、もはや父のやり方にならって権威によりかかるのではなく、経験による確実性を身につけるために、自主的に仕事場で実験し、人は神と共に経験することが出来る。信仰は経験によって生きるのではないが、人は経験をjする。こう彼らに語ったフランケに耳を傾けた。フランケの場合、ディアコニーの出發における、福音伝道また宣教への意志は、後にキリスト教ディアコニーに深い決定的影響を与えた社会福祉教育目標と結びついている。

フランケの教育学は大学や学校で用いるように定められた。ついには約3千人の学童と学生が毎日集まったハレの学校町にあるすべての施設において、若者が信仰をもつように、生活の中のいたるところで役に立ち、援助の備えをしているように教育され、活気あふれる行動に満ちて、いつも神の国のために働く準備をしていた。[13]

彼の新しい学校方式は、17世紀の学校改革者の提案にさかのぼり、なおヨーロッパで有名などという評価をされる、他のものでは替えられない新しいものを生んだ。その学校ピラミッドの中に、自由学校と並んで国民学校があった。貴族の子息のために「ペダゴギウム・レギウム」[P 臆agogium regium]がつくられ、一方才能のある市民の子どものために、高等学校卒業資格がとれるラテン語学校が併設され、2つは平行して基礎をつくり拡充された。フランケは彼らを神の国のために働く協力者に養成するために、才能を持っている子どもをあらゆる階層から募集した。彼自身は、最も貧しい子どもを高等学校卒業資格をとるまで支援した。それと同時にフランケが学校制度のなかに身分上の規定を大幅に認めたとしても、従来の高い身分の教養人の特権は根本的にくずされた。

女学校制度の拡充は本質的な意味をもった。1千人を超える女子が

同時に彼の学校に通った。最初の女子小学校が創設されて、それが発展しなかったとしても、女子が大学進学資格をとるまで教育を受ける可能性は基本的に開かれた。フランケは、それを無条件に支持した内容豊かな女子教育の最初のパイオニアである。

教師養成において、フランケは新しい道を歩いた。彼は、最初の教師を2時間の授業を聴講するために施設で無料給食を受け、互いに臨時聴講をしている学生たちのなかに、見つけた。これらのゆるやかに組織された「教師養成学校」[Seminarium Praeceptorum] から「教師養成専修学校」[Seminarium Selectum Praeceptorum] がつくられ、その中で予備学校から選ばれた10人の優秀な学生教師が2年の入念な教育を受けた。ここにドイツにおける組織された教師養成のそもそもの始まりがある。

19世紀にいたるまで学校制度を悩ませた抑制のない殴打はここで禁止されるようになった。また授業中や休み時間の絶え間ない生徒の監視はされたが遊びは禁止されなかった。時代の状況からある種の限界が明らかになり、配慮と愛の掟をこの全体の枠の中で評価しなければならなくなった。ある種の祝祭文化は、最初からあった。子どもたちはその週は小さな贈り物をもって喜んだ。[14] 熱心な子どもや、情熱的な学生たちは学校町に最初の特徴を与えた。

まもなく、ハレの教師たちは、新しい学校方式によって様々な学校をつくるように、諸方面からフランケに要求した。1695年からこの方法でロシアとの最初の関係が結ばれた。ペーター大帝はハレに大変興味を示し、女帝はお忍びで施設を訪問した。バルト海沿岸諸国の皇帝の大臣はフランケの個人的な友人であった。オランダとイギリスを越えて、北アメリカ、南アフリカとの関係が広がり、それはスカンジナビアを越えて東インドへ広がり、シュレージエンを越えてオーストリアとハンガリーへ、ジーベンピュルゲンとコンスタンチノーブルへ、スイスをこえてフランスとイタリアへ広がった。フランケの生徒たちは新しい信仰をもつ教師また使者として、いたるところに姿をあらわした。彼らは、世界教會的な兄弟関係と、ヨーロッパの信仰の危機を考えて、活動全体に協力するように、ばらばらになっていた教会を結

びつけようとした。

アウグスト・ヘルマン・フランケは宗教改革後最初の偉大な世界教会の重要人物である。[15]

多くの外国の学生たちはハレに向い、当時最も近代的な大学に集まった。例えば、医学部は学生の臨床養成を施設の病院の中に受け入れてもらうことなど、フランケに負っている。

## 5

### 公共生活と社会生活の改造を目指す 覚醒したキリスト教徒による宗教改革の全体

偉人の列に属している学生の父アウグスト・ヘルマン・フランケは、国の内外の学生たちと共に、喜んであかし証するキリスト教のように、信仰に覚醒し、進んで献身する者による世界の宗教改革の全体を宣べ伝え、それが彼を、科学的神学者のための神学者、教育者、社会学者、社会科学者、衛生学者などの先駆者とし、未来の展望を開く改革プランを構想した。

フランケの改革意欲は、当時の生活全体の広がりに向けられ、軍隊制度と正当な戦争の問題を実際に改善しようとする人たちの中に引き込んだ。彼は裁判の改革を求め、すべての法律書をドイツ語で書くことを求めた。またすべてのごまかしをやめ、見通しのきく訴訟手続きの簡略化を求めた。

彼は傭兵制度の廃止を求め、同様に、兵隊の屈辱的な体罰の廃止も求めた。彼は兵隊手帳を編集した。

彼は大衆的な啓蒙文書などによって、国民の健康改善のために集中的に努力した。

王立学校からプロイセンの公務員と全将校の大部分が育ち、その中から2、3人は卓越した代表者となった。敬虔主義の影響のもとで、バロックの豪華な生活態度から離れ、実際問題に役立つものとなった貴族の反封建化に向かう貴族の変革が起こった。外見的には、小さく

黒っぽい、飾り気のない背広というように着るものが変わった。公共生活、社会生活全体は福音にしたがって変えられていった。[16]

アウグスト・ヘルマン・フランケは、よきヨーロッパ人となった。彼は全国から集められたエリートたちが全ヨーロッパに、まさに全世界にそうした改革センターのネットを広げていく敬虔主義改革の担い手を養成するために、大学教育の最高段階である「大学」[Seminarium Universale]を計画した。その若者たち100人がこの目的をもって毎年「大学」を巣立って行った。すべての階級で、ドイツの内外で、ヨーロッパで、また世界のあらゆる場で真の改革が期待されたこの「しゅびょうじょう種苗場」は、この方式での改革を実現することはなかった。

だが、ブランデンブルク - プロイセンの国は、初めはためらい、不信でもあったが、その後できるかぎりの援助をおこなった。

フランケの社会福祉政策の普遍主義は、他の国で効果的に広まった。このことに関する研究はまだ終わっていない。

ここで言及すべき彼の世界教会への努力は、実践的な作業班をつくり、イギリスの教会の指導者たちとデンマーク国教会の指導者たちを、東インドの伝道に導いたことである。彼らはイギリスとデンマーク、また内国教会でも影響を与えた。ルター教会はペンシルバニアで最初のドイツ人ルター教会連合を発足させるために、また彼と彼の息子の努力によるインドの若き宣教教会の面倒をみることによって、彼の従来ヨーロッパ的偏狭を克服した。

彼が「ドイツの牧者」としてすべての階層に働きかけてきたことについては、約4万通の受け取られた手紙が証明している。彼によって行われた文書伝道は、当時、発行部数50万部の高記録を達成した。

カNSTAイン聖書出版の設立と促進によって、聖書頒布は著しく拡大した。それはヨーロッパで、同じ時代に始まった聖書批判と不思議に並行して起こり、その時の聖書への熱中は重要な助けとなった。

この重要な課題のために、アウグスト・ヘルマン・フランケは持続的に大きな資金を必要とした。フランケの施設は資金の面で新しい経営方式をとった。

寄付によって公共施設を運営するこれまでのやり方と並んで、フラ

ンケは施設の資金の基盤を、高い収益をあげる事業経営によって確保し、整備しようとした。そのために、入手可能な国の特権と特典を得るためにどこまでも努力した。彼は、寄付する喜びはある一定の限度をこえることはないこと、また、ささげる能力は無限でないことを認識していた。彼は、寄付者の了解を得て、寄付の一部を非常に早い時期に収益事業の投資につき込んだ。彼は、最初は確固とした計画をもたないで、収益を得る可能性を手探りしていたが、卸売りを試み、貿易と工場経営も始めた。また、ハレの人たちは出版業と医薬品取扱業に集中した。彼は印刷のための製紙工場、本の販売をする出版社の事業経営を成功させようとした。農業経営そのものと家畜販売の多くは自給自足し、コスト削減に努めた。

フランケの存命中に10万ターレル以上が使われ、20万ターレル以上が学校と生徒たちのために支出された。1人のただの個人、1人の牧師であり、教授であり、財産はないが、神の助けを信じて成功を企て、そのような施設を大々的に建設した、彼は、今まで聞いたことがない何か新しい刺激的な同時代人であり、また、そうありつづけた。一方、寄付金そのものはかろうじて30年間、収入の12%を保ち、事業経営からも収入全体にふさわしい収益が上がった。高等学校自身は言うまでもなく自給しなければならなかった。合理化を目指して計算できると努力するすべてについて、フランケは、どこまでも基本的に忠実であり、事業経営も同様に神の国計画のためには無条件であり、貧民のための薬の無料配布のように、生徒や大学生のための無料給食の拡充も無条件にはじめた。孤児院の薬局は、設立者の遺言に忠実に、設立した初めの100年間、13万ターレル分の必要な薬を無料で配布した。プロイセンに厳しい困窮が広がった時、フランケの息子と教え子たちは1千人の生徒たちと困窮に苦しむ人たちを、大幅に増資された施設の資金を失いながらも黙って助けた。フランケの家族自身は貧しいままであった。

私たちはアウグスト・ヘルマン・フランケにおいて-100年も前に困窮と取り組んだフランス・カトリック教会のヴィンセンティウス・ア・パウロ(1581-1660)のような最初の偉大なカリスマ的な人物に-ドイツ

の福音主義ディアコニーの中で、出会うのである。彼のカリスマが数え切れないほどの協力者をつくった創意に満ちた自発性は、方法の天才性、奉仕意欲の徹底性、また人に伝わって感動させる働きの中に証明されている。

フランクは、その後の時代のディアコニー施設共同体モデルを提供している。ハレの敬虔主義は、大規模な社会改革運動として、打たれた傷の癒しを求めることだけに固執してとどまっている限界を超えた。それ故、彼は[困窮の]発生を阻止するために戦った。歴史的な研究は、イギリスのピューリタンの中に資本主義の出発を見、ドイツ敬虔主義の中に社会主義の始まりを見る。その際、人が適切な社会福祉政策の設計図をもっていて、献身的な協力者を駆使できるならば、多くの改革がなされると自覚して嬉々として楽天的に問題に取り組み、教育に熱中した敬虔な初期啓蒙主義の影響は明白であった。これは確かにドイツ・ルター教会の中で新しい響きをなしている。

彼の最も偉大な実践的な成功は、この国のハレの敬虔主義が到達したものであり、それが彼らを守った。古いプロイセンは彼によって決定的に形成された。社会福祉国家への道は、近代に強制されたものであった。この敬虔主義はドイツの国の先端で重要な助けをなした。彼は、この国に社会福祉の責任感を押しつけただけでなく、プロイセン教会民のあらゆる階層に社会福祉の責任感を強いた。[17]

不思議なことに、南ドイツのとりわけ温和なシュペーター精神に刻印されたヴュルテンベルクの敬虔主義は、こうした社会福祉に取り組む不屈性という点ではついていけなかった。ヴュルテンベルクでは殆どなにも起こらなかった。[18] ハレの敬虔主義が直接に足場をかためているところでのみ、孤児院が設立され、また学校制度の著しい発展があった。

だがハレの敬虔主義を受け入れていないところは、旧態依然のままであった。孤児院は子どもが早期に死んでいく温床であり、汚れと、感謝を知らない愛の欠如の温床であった、その結果18世紀の終わりの3分の1には、最も緊急に解決しなければならないことがいくつもあった。子供を家庭の保護にゆだねるほかに、啓蒙主義市民階級のもので

急いでなすべき人道的運動はなかった。[19] そのように状況は警告していた。

ハレの敬虔主義が一貫出来なかったのは、真の民衆性の欠如が原因であった。とりわけ、アウグスト・ヘルマン・フランケの死後、それは合法的な狭いものに展開していった責任がある。ここには人が覚える喜びとか美しさに直接に触れて共感するものが欠けていた。素朴で厳しさが強調される学校町の狭いきれいな路地は、典型的なプロイセンの北ドイツのものであり、兵営のような印象をよびました。[20]

「ドイツの<sup>ほっかいしや</sup>牧会者」の晩年は、人知れぬ悲しみがあつた。彼は、彼が達成出来る以上の努力をした。彼は多くの計画をかたわらに置かなければならず、協力者は不足しはじめていた。啓蒙主義は学生たちの身分のもとで進められた。彼自身が新しい時代精神の潮流に取り組みなかつたことについて、それと本気で出会う責任があつた。彼の教育の楽天主義は自分を冷静にするために役立ったに違いない。世にある悪と謎めいたものは、単純に、撃破できるものではない。彼はベルリン政府との親密な関係によってのみ - フランケの事業が属している学問的枠組みの中に専門分野をもっていない - 和解のない正統主義の集中攻撃に屈しなかつた。その時、彼はベルリンに領邦等族とつながりをもつ正統主義の前に逃げ場を探さなければならず、彼は、政府は、その個々の共同体がまだこれまで以上に独立しておらず、動かない制約のない、国教会と同じように、すべての統治を集権化すべきと考えた。

フランケは、ヨーロッパの福音主義教会に集まりディアコニー協力を可能にした少数の決然とした人たちの中で、活動能力を失った国教会を内側から動かし、活動しない硬直をゆるめる道を示した。だがその経過自身は、次の世紀に、なお深く終わることなく継続していくにちがいない。

## 6

ツィンツェンドルフと兄弟団 - ディアコニー活動をする  
教会のモデル - 宣教奉仕 - 共同体にふさわしいこと - 兄弟団

ライヒスグラーフ・ニーコラウス・ルートヴィヒ・フォン・ツィンツェンドルフ(1700-1760)は徐々にはっきりしてきたキリスト教ディアコニーの新しい流れに貢献した。彼は教会史上の元祖的なすばらしい人物である。また古いヨーロッパの高級貴族の一人として、神の恵みの伝道者、宣教者、世界教会運動の有力な準備者となった。

2つの願いが絶えず彼を駆り立てていた。「私は子どもの頃から、イエスの永遠の神性を興奮しないで、心からの愛をもって、そのことを聞けば生きている私自身の心を魅了する感動を持って、他の人に伝えるための火を、私の全身の中に持っていた。」そしてこの目標のために戦う仲間を得るために「入会する」という基本的な要求を加えた。[21]

彼の一生の足取りは、キリストへの出発をした弟子たちと同じものになっていた。彼は、すべての解放された教会の中に、カトリックの最も高貴な代表者の中に、イスラエルの民の中に、また異教世界に追放されたすべての集団の中に、いたるところで彼ら[キリストの弟子たち]をみた。彼らが死んで忘れられるのは当然ということ容認できなかった。彼は貴族世界の中にいる同じ身分の仲間を忘れなかった。人は高級貴族のなかにいる彼をボイコットしたが、彼はキリストに無私奉仕をする多くの家族を彼らの中で獲得した。

彼の最初の協力者は、探したり呼んだりしなくてもあらわれた。それは、対抗宗教改革の時にボヘミア - モラヴィアに追放された威厳を備えた兄弟団の子孫で、モラヴィアの人たちであった。思いがけなく兄弟団の再生が起こった。彼らは、憤慨する正統主義の攻撃に対して、とどまって働けるように、ふさわしい保護の覆いをつくった。

この再生した兄弟団は、ツィンツェンドルフという人物の影響の下で、最古で最小の最も能力のある純粋なドイツ人という枠組みを打ち破った最初のドイツ人自由教会へと、成長した。ここで信徒と神学者との区別は意味を失ったものになった。職務というものが、才能や召命や実証と置き換えられるようになった。神学者は専門家と取り違えられることはなく、必要とされたが、彼は兄弟たちの中の兄弟にとどまった。国の干渉から自由な自由教会が生まれ、彼が自らヘルンフー

トの「日々の聖句の小冊子」[Losungb herein]を比類のない手段と記念碑にしていたように、それが正しい霊、戦う者の精神、使者の精神を活気づける時、小さいが決然とした少数派に、何が力と賜物を奮い立たせることができたかを示した。ここで未婚の女性は「戦士の結婚」の中にひとしく順応しただけでない。教会会議によって決めていく同胞教会の中に、また共同体の集会の中でも、彼らは居留地と意見を引き継ぎ、また女性のグループの中にも責任をもたせようとした。教会会議できめられた一致は、信仰と教育と愛の共同体を形成した。

ツィンツェンドルフは、モラヴィアの人たちと、キリストの村を建設した。それはバロック風の祝祭の輝きと解放された陽気さの中で、新たな同胞教会の鏡に映る姿となった。その中で、活発な会と共同体の精神が生まれた。その仲間の中に見捨てられ、裏切られる労働者はいない、また孤立し忘れられる老人はいなかった。節度ある熱意をもって異なる肌の色や人種を区別しない兄弟会が実践された。

教会員は様々な会の中で、そこにある家族の絆に従うように、年齢と性別によって分けられた。未婚の男女の会全体は、年齢別グループにわけられた。兄弟と姉妹の家は非常に早い時期に出来た、その中で成人した独身の兄弟と姉妹は、共同生活をし、共通の生活水準を保ち、一緒に料理し、広い農場の種々の仕事場で働き、大きな寝室で眠り、その仲間から、ふさわしい会の長老と最も親しい協力者を選んで、会の礼拝と祝祭を催した。ここに一つの力強い固有の生き方が発展した。

結婚した人たちも同様に、互いに一組の夫婦の会をつくった。彼らは責任者を選び、会の祝祭と愛餐をおこなった。やもめとなった兄弟と姉妹は、男やもめと女やもめの家のなかで一緒になった。共同体の老人たちの中で生活保証のない人はなかった。

会に組織された人たちは毎日礼拝と歌の時間に集まった。共同体自身は教会として集まり、宣教奉仕、移民と世界教会奉仕は、本質的な課題と見られ、奉仕できるすべてのことがなされ、彼らは世界的な広がりをもつキリスト教のただ中にいた。このことは彼らの会の精神を狭いものにしない、彼ら各人は、実際に旅の杖を手にもった。拘束と自由は、そこで互いにおりあいをつけるようになった。[22]

人は人間性を最悪に打ちつけられ、おとしめられているところへと入っていった。人間性を奪われた黒人奴隷、死んでいるようなインディアンの民、ホッテントット、エスキモーの人たちに、無私の宣教奉仕がなされた。ツィンツェンドルフは、東ヨーロッパにおいて、彼の兄弟たちと共に、数世紀にわたってアジアの奥から進入してくる人たちに対抗し、ヨーロッパの警備に携わってきた小さな民族を援助し、その宗教的すなわちキリスト教的な、また民族の生活を新しく形成するように助けた。エストニア、ラトビア、ヴェンド[スラブ]において、スロヴァキアとその周辺地域で、信仰覚醒のためにまた、民族の復興のための奉仕によって、神からいただいた賜物と使命を新しく理解し学んだ。

ツィンツェンドルフが近代の内部でディアコニー事業の形態と自己意識を展開してきた貢献は、この広大なライフワークの枠の中に横たわっている。

ツィンツェンドルフという人のキリスト教は、彼の中に燃え上がるイエスの愛の中にあり、すべての人、またそれぞれは人間兄弟であり、世界全体であり、イエス・キリストの証言であるという、抑えがたい渴望と一致した。ここには、絶え間ない宣教行動への衝動が根を張っていた。それと同時に、彼と兄弟たちは近くにいる人、また遠くにいる人に証しする奉仕の方法と内容が直接に示された。彼はこの世界的な使命のために領邦教会の硬直した状態をこじあけるために、全ヨーロッパの移民活動のなかで奉仕しようとするすべてのグループを集め励ました。

19世紀に、ハレの施設が啓蒙主義に帰属していた間に、この群れからかなりの数の内国伝道とディアコニーの初代の男女が出ている。

彼は、ディアコニーが行う教会共同体のために、同胞教会の中で後の時代にも個々の人物像にいたるまでわかりやすいモデルを残し、自由教会、宣教義務、そしてディアコニー、身の丈にあった共同体、そして福音主義キリスト者の構成員の内部にいる全ての人たちの兄弟団を今も体現している。

ベツレヘム - アメリカにおける「共産主義的」  
ヘルンフートの開拓地 - 自発的精神と喜び

ディアコニーの働きをした共同体のもっとも印象的な例は - [信仰に] 覚醒したメンバーの3分の1の人たちが、ドイツ人のコロニーの間で、あるいは原住民の間で、いつも誰かが奉仕をしていたペンシルバニアのベツレヘム「宿营地」であった。そこには絶え間ない往来があった。ベツレヘムに残る古くからの人たちと、すべての人のためにパンがつけられていた。そのために、捧げものがなされた。

「われわれの結婚した人たちは、旅の途上にあるかのような暮らしをした - 男たちは自分のために、女は自分のために、子どもは自分のためだけに - 彼らの暮らしは、私たちが最も好ましいと思うような暮らしではなく、むしろ貧しさのために、各夫婦が1区画ずつをもらって多くのものを建てるところまで到らなかった。」 [23]

開拓時代の初期に孤独な家庭生活というものではなく、料理をするにしても食事をするにしてもすべては一緒だった。だが、ここほど、多くの歌が歌われ演奏される楽しい共同体を見ることはほとんどなかった。最初の北米のパイプオルガン製作者はこの共同体の出身者であった。トロンボーン楽団は兄弟団の共同体から生まれて、また大海のあちらこちらの教会にその道を広めた。

音楽と並んで詩は、アメリカ、イギリスにおいて、ドイツにおいても、彼らが足場を固めた共同体全体に、ヘルンフートの救済宗教が放つ明るく喜ばしい信仰を表明した。いたるところに美しい庭園と、時代の感覚にあった小奇麗な場所と、並木道と、そして高貴なブルジョワ的なバロック風の、まぶしいほどの陰影のある部屋をもつ、多色の会の会館と共同会館がつけられた。それらは整然とした精神をあらわしているだけでなく、特徴となった様式に対する意味と、静かで高貴

な美しさもあらわしていた。

キリストが彼らに示したことに対する、あふれるばかりの感謝を表す救済宗教は、フランツィスコのような気持ちにさせる快活さと、ゆったりとしたものの基礎と可能性を残した。

「文字通り、夜通し際限なく働き、歌い、演奏するこの共同体、その几帳面なやりくりとあふれるばかりの明朗さと工場と愛餐と、その波うつ穀物畑と、誇らしげな家畜の群れと、成長する商業と、合唱会館と、子どもの施設と、学校と宣教事業を持つ、共同体がある - これがベツレヘムである！」<sup>[24]</sup>

彼らは働くこと、歌うことを知り、生きること苦しむことを楽しんでた。ツィンツェンドルフのまわりにいる男女の顔は大きな苦労の跡を刻んでいた。それは英雄的な情熱ではなく、内面から湧き出てくる兄弟の情熱のように見えた。

巡礼者共同体はたびたび追放されたが、彼らはいつも巡礼者の杖を手に持ち、ツィンツェンドルフと兄弟たちは一緒に即席で働く労働スタイルを育ててきた。彼らは決まった働き方を義務づけられることは一度もなかった。すでに100年もの間に、学校教師や教師たちが束縛し、恐怖を与えて教育してきたやり方に反対し、愛と喜びと自由のなかで教育をおこない、子どもを人として扱いその成長を支援した。この理由で、ツィンツェンドルフは、若者の偉大な解放者に属した。子どもは気高く自由に扱われなければならない。一生の間、伯爵はオリジナルなものに特別な愛着をもち、コピーを好まなかった。彼は教育者に寛容を求め、さらに、個々の子どもたちの特別な性質を、愛情を持って直感的に理解し受け入れる寛容を求めた。子どもたちは彼にとってだれ一人同じ人ではなかった。<sup>[25]</sup>

そこで彼は新しい教育者のタイプを養成した。彼はことばによってよりも人格的な存在によって影響を与えるこまかな思いやりをもった静かな態度と、愛に満ちた感情と、ひかえめな態度を求めた。

ツィンツェンドルフの生涯においても、人知れぬ悲劇が明らかになった。彼は天才的な不思議な方法で、18世紀に奥深いところで不確かになってしまったキリスト教全体を吟味した時、これを全く偉大なも

ので、その信仰はもっと楽しいものだとはっきり表明したが、それはキリスト教に強い衝撃を与えただけであった。だが、19世紀におけるディアコニーと内国伝道は、ここに満ちているつまずきをぬきにしては理解されない、また、その感謝や、その預言者的な勧告や、その世界教会的な遺産や、そしてまた静かな輝きのあふれる豊かさをぬきにしては理解できない。おそらく個々の人の、兄弟団の仲間たちに決定的なかかわりをもち、ディアコニーの分野で光を放っている、比類のない最初の時への憧れも、これをぬきにして理解できないだろう。[25\*]

## 8

物乞い - 飢饉 - 18世紀末期の伝染病 - 啓蒙主義社会の  
人道的慈善活動 - 新たな衰退 - 永続的な功績

アウグスト・ヘルマン・フランケやツィンツェンドルフのような人物が実現した、キリスト教全体を奉仕するものにつくり変えたこの広大さに対して、18世紀においてなお啓蒙主義社会の内部に、大まかな見解を別にして、ディアコニーの奉仕を起こしたものが働いていた。啓蒙主義社会がある種の至福を求める身近な問題から、人間性の思想に至るまで、この世紀の残りの3分の2の間に行動をおしすすめるためには、おそらく、第3の世代を必要としていた。[25\*\*]

ドイツ全体を襲った恐ろしい物乞いの難は、たちまち、全ての人が物乞いをするように広がっていった。

「そもそもすべての人が物乞いであった。外部の権力からお金を受ける政治家や、何らかの清潔でない務めをして君侯から報酬を受け取る宮廷役人から始まって、下級役人あるいは高貴な館の召使いにいたるまで、そうした人々の仲介もまた、お金でやりとりされねばならなかった。」[26]

職人は、毎晩、彼の家族の者と一緒に町で物乞いをするためにぼろ布を身にまとった。住民の10%がドイツで物乞いとなり、その中でカトリックの地域はもっとひどく見えた。経済状況はよくなく、国内の

多くが沈滞し、君侯たちは税を浪費した。物乞いに布告を発し、騎兵が国中で物乞いを追跡して追い立てても、効果はなかった。追跡者が姿を消すと、物乞いは再び姿をあらわした。

しかし、1772年と1773年にクアザクセンでは飢饉とその後の伝染病によってだけでも15万人の命が奪われ、1784年と1785年の厳しい冬に新しい大災害が近づいた時、人は発展する都市の市民階級の内部を思った。そこで冷静で面白味のない啓蒙主義社会は真の感動に触れた。牧師が仕える者と同じ身分というのではなく、「真の博愛主義者」としてだけ参加している、そのような教会を人は求めなかった。1772年と1773年の飢饉の年に、給食施設と貧困施設の開設によって、すべての貧しい人たちを十分に養った、ハノーファーの市長アレマンは模範的に行動し、その結果、他の町では数千人もの人が亡くなったのに、命を失う人はいなくなった。

発展したハンブルクは、貧民施設全体の模範となる施設を1788年11月2日に開設した。その課題に熱中した市議会の人たちは、すべての街角や路地、そして貧民の環境をくまなく調べた。ボランティアの人たちで地区ごとに手際よく分配し、援助を必要とする貧民の数は10年間で半分に減った。物乞いをする貧民は街路の光景から見えなくなった。[27]

すべては自由な寄付でなされ、どこでもおおらかな気前よさが支配していた。ハンブルクの貧民施設は毎年18万マルクを受け取り、キールの7千人の住民たちは毎年1万3千マルク以上を貧民に与えた。南ドイツにおいても、同じくらいの寄付金が集められた。しかし、長くなると耐えることができなかった。一部では、人は寛大な気持ちで助け、生計を励ました。それを非教育的な方法でおこなって次第に損なっていく。啓蒙主義の人たちが、平凡な思いによって感情のこもった高揚をすることはよくわかる。熱意がゆるみ、戦争の困窮と経済の衰退が訪れると、それは裕福な人たちを打ちのめし、貧困を厳しくし、不幸は再び増大した。

ついに増大した赤字は、結局、公共の資金から補わなければならず、貧民福祉は縮小された。しかし、なおかなり多くのことが起こった。多

くの市の孤児院で見た信じられないような状況は、子どもたちを家庭教育に解放し、宿泊させることで済まされた。

1773年ゴータで起こったことは、1772年すでにコペンハーゲンで起こっていた。新しい工業部門の導入によって、避雷針、土壌改良、火災保険、寡婦銀行、貯蓄銀行、工業高校、裁縫学校によって、民族の高揚がおこった。そのことに牧師自身が指導的に参加し、しばしば本来の職務を引きのばした。1778年、ライプツィヒのサムエル・ハイニッケは、最初のろうあ学校を開設し、音声学の方法によって授業をした。イギリスの慈善家ジョン・ハワードはヨーロッパ中の監獄と病院と精神病院を見てまわり、その中にある恐ろしい状況を世間に警告した。罪がないのにあざけり笑い、危険であれば、たびたび監獄の壁に鎖でつなぎ、死ぬまでムチ打ちを強要してきた狂人たち[*die Irren*]には、今や、よい時代が到来した。医者ピネルは当時、激しい反対にあいながらピセトールの狂人たちを鎖から解放し、彼らを社会的に危険な人としてではなく、病人として治療することを敢行した最初の人であった。

啓蒙主義時代における人間性の思想は、実を結ばないままであったのではなく、博愛の数え切れないほどの手本を示してきた。かなりの数の荒れ果てた状態が除去された。公立病院の看病の分野も、女性が働く独自の分野も悪い状態であった。人は、しばしばまったく墮落した人間たちによって構成されている看護人たちと一緒に働いた。その状況はさらに説明するすべてをあざ笑った。ハンブルクの病院さえ、いつも一つのベッドを2人の病人で分け合わねばならなかった。どの病人も、この病院に移されることに抵抗した。そこで、病人は貧民の部屋の中に置かれ、他の貧民が病人を世話した。

1789年フランスで革命が起こり、革命の年は、ドイツにも影響を及ぼし、窮乏の時が来た時、多くのものが滅び、よい状態が失われ、悩みの種がもたらされた。19世紀は嵐のもとに始まり、啓蒙主義は「自分で背負い込んだ」未熟性を慈善の領域でも、すこしずつ適切に克服するだけであった。十分に解決されなかった18世紀の社会問題は、新しい世紀に持ち越された。とはいえ、一般大衆はこれ以上の重要な貢献を教会に期待することはなかった。[28]